

平成 21 年 6 月 2 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720001

研究課題名（和文） 和辻哲郎の倫理学・思想史研究に関する比較哲学的考察

研究課題名（英文） Comparative philosophical Studies of Ethics and History of Ideas of Tetsuro WATSUJI

研究代表者

飯嶋 裕治（IIJIMA YUJI）

東京大学・大学院総合文化研究科・助教

研究者番号：80361591

研究成果の概要：

本研究では、和辻哲郎の倫理学・思想史研究の持つ豊かな（しかし未解明の）理論的可能性について、新資料の収集・読解を通じて、また比較哲学的な観点から、改めて徹底的に考察し直した。それによつては、彼の倫理学が、マルティン・ハイデガーの「了解」概念に基づく解釈学的行為論に大きな影響を受けていること、また、それが Ch. テイラーの「表現主義」的な発想と極めて似通った「人間存在」観に基づくことが解明された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	180,000	2,280,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学／哲学・倫理学

キーワード：和辻哲郎、マルティン・ハイデガー、チャールズ・テイラー、規範性、信頼、解釈学的行為論、表現主義的存在論、比較思想

1. 研究開始当初の背景

和辻哲郎に関する本研究の背景について、先行研究との関連から説明するならば、その主眼は以下の通りであった。すなわち、和辻の倫理学は、従来の研究においてはもっぱら「日本的」「東洋的」な倫理学と評価され、その特殊性ばかりが注目されてきたという傾向があったが、それに対して本研究では、

むしろ逆に、その倫理学の普遍的な理論的可能性を積極的に追究することを、当初から目指していたと言える。

また、こうした普遍的な理論的可能性に注目することによつてこそ、和辻の倫理学を現代の倫理学的議論の布置状況の中へと適切に位置づけ直すことが可能になるはずだという目算も、本研究の大きな背景の一つとなっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「和辻哲郎の倫理学・思想史研究に関する比較哲学的考察」という研究課題名にもあるとおり、まず第一に、和辻哲郎が行なった倫理学と思想史研究の双方について包括的に考察し直すことであり、また第二には、その考察を「比較哲学」的な観点から行なうという点にあった。

その中でより具体的な課題としては、以下の通りである。

(1) まず、和辻の倫理学が、「普遍的な倫理学理論」としてどれだけの理論的な可能性を持つものであるのかを積極的に探ることが、本研究にとっての最重要課題である。この点については、『人間の学としての倫理学』『倫理学』等の理論的な著作を中心に、検討を進めるとした。また、その理論的立場から顧みたときに彼の思想史研究がどのように捉え直されてくるのか、という点についても検討課題とした。

(2) このような検討を進めるにあたっては、特に、和辻が深い影響を受けたマルティン・ハイデガーの解釈学的現象学、そして和辻の理論的立場と大きな共通性が認められるチャールズ・テイラーのコミュニタリアニズム的な倫理学・思想史研究と、随時「比較」をしながら考察を深めることが重要である。こうした「比較哲学」的な手続きによってこそ、和辻の思想の特質および普遍性を明瞭にすることが可能になるはずである。

3. 研究の方法

(1) 資料の調査・収集と電子テキスト化

和辻哲郎の基礎的テキストの一層の充実を図るため、彼の講義ノートやメモ等の未公開資料および全集に未収録の著作などを収集し、調査・読解する。また、その中でも重要な資料に関しては電子テキスト化する。

(2) 和辻哲郎の倫理学の比較哲学的な研究、およびその現代倫理学における位置づけ

和辻哲郎、マルティン・ハイデガー、チャールズ・テイラーらの文献の基礎的な読解作業を行ない、その相互参照によって和辻の倫理学の理解を深める。また、現代の倫理学における理論的研究も踏まえ、和辻の思想の現代的意義についても考察する。

(3) 海外の研究者への和辻の思想の紹介

和辻哲郎の倫理学の普遍的な理論的可能性を吟味することを一つの目的とする本研

究において、彼の議論を海外の研究者に紹介しようとする試みは必須である。積極的に外国語論文を執筆・発表することによって、彼の思想の本格的な紹介と相互的な議論の第一歩を開始する。

4. 研究成果

(1) 資料の調査・収集と電子テキスト化

研究体制の構築のために、パーソナルコンピュータ式(本体、ソフトウェア、スキャナ等)を導入し、資料の電子化のための環境を整備した。具体的には、資料のスキャンによる画像データ化、OCRによる画像データのテキストデータ化、画像データ及びテキストデータのデータベース化、という一連の作業を行なうための体制を構築し、資料の電子化のノウハウを確立した。

和辻哲郎の未公開資料(講義ノートやメモ等)や、今では入手が困難となっている全集に未収録の資料を収集した。具体的には、国会図書館などに和辻の講義ノート等が収蔵されていることがわかったため、まずはこれらの資料を入手した。

そして、この収集資料に関する調査・読解を通じては、東京大学での講義「倫理学概論」のためのノートや、『和辻哲郎全集』には未収録の論文「倫理学-人間の学としての倫理学の意義及び方法」などが、和辻の倫理学理論の形成過程を辿る上で、極めて重要な資料であるということが明らかとなってきたと言える。

また特に後者の論文「倫理学」に関しては、その重要性にも関わらず現在入手が困難な資料であるという事情を鑑みて、優先的に電子テキスト化の作業を実施することにした。和辻哲郎の著作の著作権保護期間が終了する来年以降には、そのデータをインターネット上に公開する予定であり、この文献へのアクセスが容易になることが期待される。その点で、今後のさらなる和辻研究の展開のための、基礎的文献の拡充に一定の寄与をなすことができると考える。

(2) 和辻哲郎の倫理学の比較哲学的な研究、およびその現代倫理学における位置づけ

本研究の最大の研究成果は、「比較哲学」的な手法を用いることによって、和辻の倫理学理論が持ちえた最良の理論的可能性についてかなりの程度まで解明することができ

た、という点にある。

以下この成果を説明にするにあたり、比較哲学という視点によって明らかとなってきた3者(和辻、ハイデガー、テイラー)に共通する「解釈学」的な発想、そして、それも踏まえることで明らかとなった和辻の倫理学の理論的可能性の内実、という二つのポイントに焦点を当てながら、説明することにしたい。

本研究において和辻と比較・対照させるとした、マルティン・ハイデガーおよびチャールズ・テイラーの思想は、和辻の思想を理解する上で、それぞれ以下のような重要性を持っていることが明らかとなった。

まずハイデガーに関して言えば、和辻の倫理学の基礎理論としての、「人間」の存在構造の分析が、ハイデガーの『存在と時間』での現存在分析からの影響が色濃いことはかねてより指摘されてきたことであるが、本研究によっては、その決定的なポイントは、「了解」という解釈学的な概念にこそあるということが明らかとなってきた。

ハイデガーの「了解」概念は、主観-客観図式を前提とした「認識」よりも、人間にとってより根本的な理解・認知の様式として提出されたもので、それに基づく解釈学的な行為理論は、「日常性における人間のあり方」に関する哲学的考察に根本的な再考を迫るものだった。そしてこの思想を同時代人として受けとめた和辻は、自分の倫理学の基礎理論に、この「了解」概念を決定的な仕方導入していた(後述)。

また和辻とテイラーの思想の比較によっては、両者がハイデガーから同様の影響を受けていることもあり、極めて似通った倫理学理論をとっていることが判明となった。そこでの両者の最大の共通点は、「表現主義的存在論」とでも呼称すべき、人間存在に関する基本的な把握においてであり、両者はともに「表現」という解釈学的な概念を極めて重視している。またさらに両者は、倫理学理論のみならず、ある文化共同体における倫理思想史研究を重視し、また実践してもいるという点でも、同様な問題意識を持っていた。(その意味で、倫理学と思想史研究とは相互補完的な一体のものであるべきだということになる。)

そして、こうした比較哲学的な手続きを通じては、まずハイデガーを参照することで、和辻の倫理学を解釈学理論の系譜の中に適切に位置づけることが可能となり、またテイラーを参照することで、和辻の倫理学をコミュニタリアニズムや道徳実在論といった現代の政治哲学・道徳哲学の議論へと直接に結びつけて再解釈する展望が開けてきたと言える。この作業は、今後の大きな課題となる。

上述してきたような、和辻の新資料の収集・読解作業、そして比較哲学的な考察を通じては、和辻の倫理学が「解釈学的倫理学」とも呼ばれるべき普遍的な理論的可能性を秘めたものであることが明らかとなってきた。

そこで注目したのは、倫理学にとっても最も根本的な問題であると言える「規範性」の問題である。和辻は、ハイデガーの「了解」概念を踏まえて、われわれの日常性における規範理解は、「了解」という仕方での全体論的かつ非主題的な認知様式(彼の用語では「実践的了解」)をとると考察していた。そして、この解釈学的な行為論を基礎理論として、和辻の倫理学が構築・展開されていくことが解明された。

そうして本研究での最も大きな成果としては、このような和辻の解釈学的倫理学が、(ハイデガーの存在論における)「了解」概念と、(特にテイラーがその西洋思想史において見いだした)「表現主義」的な発想とが結びつくことにおいてこそ成立している、という点を明らかにしたことであるだろう。また、こうした解釈学的倫理学の見地からするならば、「価値(規範)の客観性」という今なお議論され続けている古典的問題に対しては、従来の「事実と価値の二元論」に陥らないような形の解答を示しうることも明らかとなった。

(3) 海外の研究者への和辻の思想の紹介

ドイツで刊行されているハイデガーに関する研究論文集『ハイデガー年報(Heidegger Jahrbuch)』(カール・アルバー社刊)の第7巻に、ドイツ語による論文を執筆した(2010年刊行予定)。この第7巻は「ハイデガーと東アジア思想」と題され編集されるもので、筆者は「規範全体性の了解」という概念を軸に据えて、ハイデガーの思想が和辻の倫理学理論にどのような影響を与え、またそこから和辻がいかなる独自の理論的展開を示し得ていたかについて論じた。その意味でこの論文は、本研究課題の成果をまとめた論文であり、また和辻の思想の最も基礎的な部分を海外の読者に紹介するという意義を担うものにもなると言えるだろう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Yuji Iijima, “Über die hermeneutischen Struktur der „Normativität“ der Ethik Tetsurō Watsuji: gestützt auf seine Rezeption des Denkens Martin Heideggers”, *Heidegger-Jahrbuch VII* „Heidegger und das ostasiatische Denken“, Karl Alber (『ハイデガー年報』第7巻「ハイデガーと東アジア思想」, カール・アルバー社、2010年刊行確定)

〔その他〕

【翻訳】

アルヴァ・ノエ『知覚における行為』(門脇俊介〔監訳〕、飯嶋裕治、池田喬、吉田恵吾〔訳〕、春秋社、2010年刊行確定)

6. 研究組織

(1)研究代表者

飯嶋 裕治 (IIJIMA YUJI)
東京大学・大学院総合文化研究科・助教
研究者番号：80361591

(2)研究分担者

〔なし〕

(3)連携研究者

〔なし〕